

最新の研究成果

ついに発見！平城宮跡出土の柱根は藤原宮の柱
—694年の伐採木と確定—

女帝の元明天皇が、16年間続いた藤原宮を平城宮に移したのは和銅3年(710)のことでした。この大事業は、工事をはじめてからごく短い期間でおこなわれたようです。

当時であって、さぞかし宮都の移転は難事業であったことでしょう。では、どのようにしてこの遷都が達成させられたのでしょうか。その答えは奈文研の長年にわたる平城宮跡の発掘調査によって明らかにされつつあります。ここでは、平城宮跡内の発掘調査で出土した柱根に焦点をあてて謎解きをしてみましょう。

これまでに、奈文研による平城宮跡内や京域の発掘調査で、出土した柱根の数は1200本以上にのぼります。また、藤原宮跡内や宮外の調査でも110本以上の柱根が出土しています。これらの柱根の大きさは、直径20～40cm前後のものが多く、その形状は丸柱状に加工されています。柱根の樹種は、これまでの同定結果をみるとその大半はヒノキが占め、あとはコウヤマキといったぐあいです。樹齢は、200～300年あまりのものが多く見受けられます。

これらの柱根は、年代学研究室が1980年から長年にわたって推進してきた年輪年代学の研究に大変役立ったことは言うまでもありません。

出土柱根は、原木の外側が削られていたり、1000年以上土中にあつたために外周部が腐っていたりして、柱根の伐採年をピンポイントで確定できる状態のものは長いあいだ見つかりませんでした。

ところが、このたび、年輪解析をした柱根を再度見直す作業のなかで、柱根の一部に樹皮を剥いだだけの形状をとどめていたものが見つかりました。かつて年輪年代学の研究開始当初は、経験が浅かったために、辺材(白太)が完全に残っているかどうかという大事な点を見逃していたのです。これこそ、四半世紀にわたって探し求めていた柱根です。この柱根は、1967年の第41次調査で発見されたもので、第一次大極殿地域の東面を画する第1期東面築地回廊(SC5500)の東側柱列の柱筋に重なる南北塚SA3777)に使われていた柱7本のうちの1本です。柱根の直径は約40cm、長さは約1.0m、樹種はコウヤマキで

した。さっそく、この柱根の年輪を再計測し、年代測定をおこなったところ、694年の藤原宮遷都の年に伐採されたものとわかりました。

この柱根は、藤原宮の建物などに使われていた柱材が平城宮造営にあたって抜き取られ、平城宮まで運ばれ再利用されたと考えられます。これまでに100本以上の柱根の年輪年代を測定してきましたが、いずれも辺材が残っていなかったため、正確な伐採年代はわかりませんでした。しかし、この柱根の発見によってこの他の柱根も藤原宮造営の柱材だった可能性が一段と高くなったのです。

短期間で平城宮の造営が可能だった理由の1つには、こうした藤原宮からの木材のリサイクルがあつたのです。この柱根は、われわれにこのことを明確に教えてくれました。宮都における建築材の再利用に関しては短期間に大事業を成しとげなければならない当時の特殊事情があつたにせよ、今、地球環境問題解決の標語にもなっている「MOTTAINAI」の精神が当時の宮都造営にも生かされていたといえるのではないのでしょうか？

(埋蔵文化財センター 光谷 拓実)



平城宮跡出土の柱根 右が694年に伐採された柱根)